

AFC フォーラム Forum

Agriculture, Forestry, Fisheries, Food Business and Consumers

11

2020

シリーズ特集：事業承継最前線／稲作経営

特集 水田農業・承継のカタチ



AFC フォーラム 11 Forum 11

Agriculture, Forestry, Fisheries, Food Business and Consumers 2020

特集

シリーズ特集：事業承継最前線／稲作経営

水田農業・承継のカタチ

3 親子間の考え方の違いを乗り越える

有限会社フクハラファーム／福原 昭一・悠平

親から子への経営承継は一般的と思われるが、考え方が相違し意見が合わないなど難しさを伴う場合も多い。現在まさに、親子間で承継を進める稲作経営体に話を聞く

7 若者を育成雇用し、地域農業を維持

青山 浩子／新潟ひかりっこ株式会社

地域の大規模な稲作経営体など第三者が農業を継承するのも、事業承継の姿。米どころ新潟で地域農業の受け皿の役割を果たす、大規模稲作経営体を紹介しよう

11 中山間集落の維持へ多様な取り組み

山田 優／農事組合法人寺内農場・農事組合法人やまどに

地域の基幹産業としての農業の承継は、高齢化が進む中山間集落では難題だ。鳥取県南部町にある二つの農業法人が選んだ道から、地域農業を守るためのキーワードが見えてきた

巻頭言

親天望気

2 農業資源のバトンパス

柚木 茂夫／一般社団法人全国農業会議所

連載

農と食の邂逅

19 オーガニックファーマーズ名古屋／愛知県 吉野 隆子

有機玄米菜食で体調が改善、食への関心から農の世界へ。農業者にも消費者にもオーガニックを身近な存在にし、農業を始めたい人がやれるよう応援していくことが私の仕事

新・農業人

23 AGURIMOON／島根県 柴原 信行

サラリーマンが家庭菜園をきっかけに本格的に農業に足を踏み入れた。人と違った作目を求め、たどり着いたエゴマで、農業独り立ちをめざす

変革は人にあり

27 株式会社KAWACHO RICE／青森県 川村 静功

米袋をペットボトルに変え、新たな売り方で米の需要を呼び込んだ。「すべて米から始まる」をスローガンに、青森から世界へ、米と地域食材を発信する



撮影：鎌形 久
新潟県五泉市
2008年錦秋

朝霧の田んぼ

■山里が朝霧（もや）にけぶるなか、稲刈り後の田圃は、森を背景に光芒に押し包まれた■

オピニオン・レポート

情報戦略レポート

コロナ後の課題は

需要の変化に対応した商品開発

—食品産業動向調査（2020年7月調査）— 15

主張・多論百出

多様な人材が農業の成長産業化を促す

次世代の心を捉え、チャレンジする力を

一般社団法人アグリフューチャー・ジャパン

合瀬 宏毅 25

フォーラムエッセイ

石垣の海で見たもの

ココリコ 田中 直樹 30

まちづくりむらづくり

日本最北の農業高校がめん羊飼育

生徒の熱意が地域を元気にする

北海道遠別農業高等学校／北海道遠別町

石川 ウーリーエル 31

書評

『100歳まで元気でボケない食事術』

NPO法人食材の寺小屋 青木 宏高 34

インフォメーション

国産農水産物の展示商談サイト

「アグリフードEXPOオンライン」のご案内 35

みんなの広場・編集後記 37

農業経営アドバイザー

TiDBit

生産者のありたい姿を実現する

株式会社食農夢創 仲野 真人 38

12月号予告

特集は、「事業承継最前線／畜産経営」を予定。

喫緊の課題である事業承継について、次号では畜産経営を取り上げる。畜産は、耕種に比べ承継費用が多額となりがち、環境面から新規の農場開設が困難といった特徴から、家族内承継に加え、M&Aなどの事例も出てきている。畜産の事業承継に求められるものとは何か、考察する。

*本誌掲載文のうち、意見にわたる部分は、筆者個人の見解です。

望天 観気

農業資源のバトンパス

農業の持続的な発展には、世代交代に伴う円滑な経営継承が不可欠である。農業者の減少と高齢化が深刻化するなかで、次代への経営のバトンタッチをどのように進めるか、とりわけ、認定農業者や集落営農組織の経営継承の対応は重要な農政課題となっている。

地域農業を支える認定農業者（法人・共同申請を除く）の37%が65歳以上、土地利用型の稲作単一経営では65歳以上が49%となっている。しかも、認定農業者の7割が後継者未定の状況にある。集落営農組織も構成員の世代交代が遅れ、解散数も増加の傾向にある。

農地利用の集積・集約化が進むなかで、地域の農地の大半を担う大規模な経営体が増えている。それだけに稲作をはじめとする借地型の大規模経営の継承は、一経営体の問題にとどまらず地域の農業振興と農地管理に大きな影響を及ぼすことになる。継承問題によって地域の農業生産や農地利用が支障をきたすことがないよう、後継者の確保状況を事前に確認し、計画的に継承対策を進める必要がある。

親子間・親族間の継承や、第三者への継承、離農・廃業する経営体の再編統合など、具体的な経営継承に対応する相談・支援体制の整備を急がなければならない。経営継承の期間中とその前後を含めた、きめ細かな伴走型のフォローアップが円滑な継承につながるものと考えられる。一方、担い手みずからにも財務諸表や就業条件など、経営内容の見える化に向けた取り組みが求められる。

新たに制定された「食料・農業・農村基本計画」においても、担い手の高齢化を踏まえた経営継承対策が盛り込まれた。地域の農地や人材、雇用や景観・文化などの貴重な農業資源を次世代に継承していくため、農業者、行政機関、農業団体などが緊密に連携しなければならない。



一般社団法人 全国農業会議所 専務理事

柚木 茂夫

ゆのさ しげお

1955年岡山県生まれ。島根大学農学部卒業。77年、全国農業会議所に入所し、2011年同会議所事務局長に就任。17年4月より現職。食料・農業・農村政策審議会委員も務める。

農業をはじめたい人に
農業がやれる支援をし
作り手も食べ手も
「幸せ」になれるよう
「笑顔の種まき」を続けます



吉野 隆子 さん

愛知県名古屋市
オーガニックファーマーズ名古屋代表

名古屋の繁華街にある都市公園・オアシス21の地下広場では毎週、土曜日になると有機・自然農法に取り組む農業者があつまるとまる。ここで定期マルシェである「オーガニックファーマーズ朝市村」が開かれている。





19頁：二人三脚で多くの研修生を受け入れてきた「なのはな畑」園主・佐々木正さんと
20頁：定期マルシェ「オーガニックファーマーズ朝市村」。マルシェには20〜30歳代の若手有機農家の参加が多い。出店料は机1本2000円のみ

早朝から行列ができる朝市村

2004年の開始から16年。コロナ禍による自粛要請以前は、朝8時30分の開始とともにドット人が押し寄せ、11時30分までの3時間で、1000人を超える来客があった。人気が高まって他の2カ所でも週1回のマルシェを開催するようになり、年間販売額は700万円を超えた。

いまは、3密を避けるため、マルシェ会場を1カ所に絞り、7時30分から入場整理券を配布して、会場に同時に入れる入場者数を制限している。それでも、待ちわびるファンが早朝から行列をつくる。

「オーガニックファーマーズ朝市村」に出店登録している農業者は、愛知・岐阜・三重・長野・静岡5県の62農家。片道2時間以上かけて通ってくる農業者もいる。というのも、このマルシェの顧客には、食にこだわる消費者やレストランのシェフなど食のプロも少なくないためだ。

ここは単なる直売の場だけでなく、農業者と実需者のマッチングの場にもなっており、その後の新たな販路開拓につながるケースもあるのだ。また、ここでの出店者との出会いを機に、消費者が畑を訪れて農作業の手伝いや農業体験をするなど、朝市村は、都市農村交流の「畑の入口」としての役割も果たしている。

さらに注目したいのは、会場には有機農業での新規就農希望者の相談コーナーがあ

ることだ。

出店者でもある有機農業者を中心に、農業研修や独立就農支援の受け皿も用意する。朝市村を通じて新規就農を実現し、いまでは朝市村の出店メンバーになっている農業者が35人にのぼる。遠隔地で新規就農した若者もいるので、実際のすそ野はさらに広い。「あちこちに相談に行つて『有機農業での就農は無理』と言われ続けて、ここにたどり着く人も少なくありません。ここで、実際に有機農業で生計を立てている人たちを見て、暗かった表情が一変して明るくなる方もいます。それだけ、有機農業で就農したくても入口にたどり着けない人がまだまだ多いんですね」と話すのは、この朝市村を運営している吉野隆子さん(63歳)だ。

神戸に生まれ東京・神奈川で育つた。大学卒業後は大手商社に入社し、その後、社内結婚して退社。およそ農業とは無縁に見える経歴の持ち主だ。それがいまや、マルシェを立ち上げて運営し、出店する農業者たちの相談に乗り、圃場ほじょうに向いて栽培方法の確認もする。さらに、新規就農希望者の相談を受け、研修受け入れ農家につなぎ、その後もサポートするなど、農業現場と消費者や新規就農希望者の架け橋としての役割を果たしている。

食から農に出会う

「思えば、最初のきっかけは高校時代」と吉野さんは振り返る。体調を崩したとき、母

親が有機の玄米菜食に切り替えると驚くほど体調が改善した。

「食べものでからだが変わることを実感し、それから有機の農産物に関心を持つようになったんです」

食への関心が、食卓の向こう側にある農の世界へとつながったのは、32歳のとき。夫の転勤で名古屋市に転居し、有機農産物や自然食品を扱う宅配「にんじんCLUB」の会員になってからのことだ。



本来の野菜の味を確認

生産者がわかる農産物が届き、「お便りコーナー」で生産者にメッセージを届けることもできる。提携生産者との畑での交流会にも参加し、農業の魅力に引き付けられた。「ニンジンを掘るとか、畑の見学に毛が生えた程度の体験だったんですけどね(笑)。でも、畑ですごく面白いと思ったのは、今も覚えています」

その熱心な姿が目にとまったのか、「にんじんCLUB」から「事務所のスタッフとし

て働きませんか」と声がかかった。主な仕事は、会員対応などの他に、提携生産者を訪れて話を聞き、記事を書くなど会報の編集作業。同じ事務所でありサイクル関連の雑誌も手掛けていたため、「食べる」という行為がごみ問題や環境問題にもつながっていることに気づき、有機物循環のなかでの農業の意味も改めて考えるようになった。

「記事を書くうちに、これからも農業について書きたい。それなら農業の基礎を学ばなければと考えるようになりました」

5年後、夫の転勤で東京に戻ると、すぐに東京農業大学に学士入学。10代の学生に混じり、仕事をしながら2年間で農学科4年分の単位をすべて取得したというから、その行動力とパワーには恐れ入る。

やがて、大学のゼミ仲間に誘われて、有機農業者が集まる「全国産直産地リーダー協議会」の事務局を手伝い始める。幹事会に出席すると、そこには、山形県米沢郷牧場グループ代表(当時)の伊藤幸吉氏(故人)や長崎県ながさき南部生産組合代表の近藤一海氏、JA山武郡市陸岡支所長の下山久信氏(当時)。現・さんぶ野菜ネットワーク事務局長)など、全国の錚々たる有機農業のリーダーたちが顔をそろえ、そこに大学教授らが加わり表面的な取材ではなかなか聞けない農業現場のリアルな話も飛び出す赤裸々な議論が展開されていた。

「その話が面白くて。大学以上に、そこでの耳学問が私の農業に関する学びの基本にな

った気がします」

全国の有機農業関係者との人脈も広がり、話を聞くうちに、有機による新規就農者の最大の課題が販路の確保であることも知った。自分のように有機農産物を求める消費者は潜在的にいるはずなのに、一方の生産現場では販路に悩んでいる。そのミスマッチを解消できないのかという問いが、心の中に残り続けた。

「有機農産物の直売市をやれないだろうか」と、知り合いの名古屋市職員から打診されたのは、夫の転勤で再び名古屋に戻った47歳の頃だ。

2002年、栄地区に公園や民間商業施設などが集まる複合施設「オアシス21」が誕生し、吹き抜けの地下広場に人の流れを創出することがねらいだった。

吉野さんは、有機農業者の販路確保につながればとの思いで、「にんじんCLUB」スタッフ時代に知り合った有機農業者に呼びかけて「朝市村実行委員会」を立ち上げ、04年10月、開催にこぎ着けた。

現場を知れば、消費者は変わるはず

ただし、スタート時の出店者は、わずか10戸。来客数も100人前後と苦戦し、一時は出店者が4戸まで減少した。チラシをつくって一人で周辺の1戸1戸にポスティングして歩くなど地道なPR活動を続けるうち、

徐々に口コミで来客数が増えた。

「地元新聞社の方が日本農業新聞の地方通信員の仕事を紹介してくれたのも、ありがたかったですね。収入面以上に、地元農家の方たちや行政職員の方たちを自由に取材できたおかげで、人とのつながりがものすごく広がりました」

開始から5年後の09年には、当初の月2回開催から毎週開催に変更。来客数の増加に伴い、出店者も増加した。



朝市村には、子どもも多く訪れる

やがて、子ども連れでマルシェ当日の会場運営を手伝う都市住民ボランティアも増え、朝市村そのものが、消費者と農業者の交流の場、また新規就農者どうしの情報交換の場になった。

「農家とまちの人がつながる、まちの人が農家に出かけていくという交流を生み出したい」との思いは、初めからありました。でも、今は当初の想像を超えて、朝市村はさまざまな役割を果たす場になりました。私個人

としては、今は交流以上に、農業をやりたい人が農業をやれるように支援していくことが、何よりも大事な仕事と感じています。これ以上新規就農者が減ったら、地域の農業、日本の農業や中山間地がどうなるのか。ものすごく危機感があります」

多くの都市部の消費者にとって、農の現場は遠いが、その距離を縮めるには、「とにかく産地に行つて体験すれば、いろんなことが見えてくると思う」と吉野さんは言う。

食べものが目の前に届くまでのプロセスやストーリーを知れば、安いものには安さの理由があること、天候不順になれば農作物が影響を受けることもわかる。そして、自分が何を食べているかが、実は田畑の景観につながっていることにも気づくはずと、みずからの経験を通して実感している。

「東京農大生のとき、20歳前後の学生間に『吉野さんの夢は何ですか』と聞かれて、『この年齢で夢なんて...』と思つたけれど、いまはたくさんの夢を持っています。販路をつくつたら、たくさん生産していくようになる。今後は優良農地を含め遊休農地が増えてきます。新規就農者には、そのチャンスを活かしてほしいし、私もそういう人たちを支えていきたい」

オーガニックを、農業者にも消費者にも、より身近な存在にし、作り手も食べ手も幸せになれる「笑顔の種まき」を続けていきたい。吉野さんの今の夢である。

(榎田 みどり / 文 河野 千年 / 撮影)

一般社団法人 アグリフューチャージャパン
副理事長

合瀬 宏毅



●おせひろぎ
1959年佐賀県生まれ。山口大学経済学部卒業後、NHK入局。NHKスペシャルなどの制作や、解説委員を長年務めた後、現職。過去に食料・農業・農村審議会委員や農政ジャーナリストの会長長なども務める。剣道やゴルフ、カメラ、庭いじりと趣味は多彩。

品

川駅港南口から歩いて15分。地上30階を超える近代的なビル群をぬけたところに、当法人が運営する日本農業経営大学校はある。周りに運河やしゃれたカフェはあるが、畑や田んぼはないし、牛や豚の鳴き声もしない。ここは農業の実技ではなく、「経営」を教える教育機関だからだ。

全寮制で一学年20人。2年間でマーケティングや流通論、労務管理など、最低でも農業法人を経営するための知識と覚悟をたたき込まれる。2013年の開校以来、すでに86人の学生がここを卒業し、全国で農業を展開している。実家の片腕となって経営を担う卒業生もいれば、みずから農業を始めたり、農業法人などに就職するなど、みんな生き生きと農業の仕事をしている。こうした人たちを見ていると、農業も本当に変わったなと、あらためてそう思う。

いうまでもなく、日本農業の最大の課題は次世代の農業経営体の確保である。19年の農業従事者164万人。そのうち、50歳未満はわずか16%しか

いない。7割以上を占める60歳以上の多くが、遠くない将来に引退することを考えると、この人数の少なさは、まさに日本農業の危機といえる。

ただ逆に考えると、このことは農業をめざす人たちにとってはチャンスでもある。農地を引き受ける若い担い手が、圧倒的に不足しているからだ。そうした動きは、農地の流動化となつてすでに始まっている。農林水産省の「平成31年農業構造動態調査」によれば、10歳以上の農地を経営する農家や農業法人の数は5万8000と、10年前の1.3倍に増加している。

一方で、10歳未満の農家が激減していることを考えると、小規模な農家が持つ農地が手放され、大きな経営体に集約される、そうした動きが見えてくる。そしてその傾向は今後、ますます強くなっていくことだろう。

そこで必要となるのは、大きな経営体を運営していく力である。農業を大規模に経営していくために

は、農産物を上手に作る技術だけでなく、市場動向をつかむマーケティング力や資金調達のためのファイナンス力、そして従業員を雇うための労務管理の知識が必要だ。経営者として、人を引っ張っていくためには人間的な魅力も欠かせない。

残

念ながらこれまでの農業教育は、農業が一つの事業だという視点を欠き、経営力よりは生産技術を教えることに重きをおいてきた。しかし、経営規模が大きくなれば、農業経営者にも一般企業と同じような力が求められる。そうした力を、農業者はどうつけていくのか。日本農業経営大学校が持つ問題意識である。

これまで農業を支えてきたのは、主に農家の子弟だった。しかしこれからはさまざまな能力を持つ、外部の人材も必要になってくる。成長する産業には、さまざまなアイデアを持った新しい人たちが次々と参入し、チャレンジを繰り返す。外食産業しかり、IT産業しかり。外部からの力を吸収して、活力を生み出してきた。

そして、ようやく農業もそうなってきた。いま農業法人として活躍している人たちのなかには、流通

や金融など農業以外の分野から飛び込んできた人たちも少なくない。農業に成長の芽を見つけ、大きな可能性を感じて参入してきた人ばかりだ。

コロナ禍のなか、あらためて感じたのは食料を生産することの強さだった。確かに春先には卒業式や送別会がなくなったり、外国との交流が途絶えたりして、外食向けの牛肉などが行き場を失った。しかし外出が制限されるなかで、巣ごもり消費が生まれ、スーパーや中食ではかえって国産農産物の売り上げが伸びた。

人は食べなければ生きていけない。またコロナ禍によって国内回帰も進んでくるかもしれない。100年に一度といわれる計り知れない大きな環境変化は、農業生産にも多大な影響を与えるに違いない。

もちろん一学年わずか20人の学生が、日本農業全体に大きな影響を及ぼすとは思わない。しかしさまざまなことにチャレンジする姿を見て、自分も農業をやってみたい。そういう若者たちを引きつけ、増やしてくれるなら20人で十分だ。そうした卒業生の活躍と挑戦に大いに期待している。

F

多様な人材が農業の成長産業化を促す 次世代の心を捉え、チャレンジする力を

Forum Essay

フォーラムエッセイ

私は幼少のころから生きものが大好きで、子ども時代は近くの田んぼや山で虫取りに夢中になり、テレビでは地球や生きものの番組をよく見ていた。

食卓に出された焼き鮭を見て、川を遡上する鮭に思いを馳せる。鮭が熊や鳥の餌になることで森が豊かになる。しゃくれている鮭の顔つきに親近感も感じて「ありがたい。おいしくいただきます」と焼き鮭に感謝を伝える。

大人になってからは「サメ」のとりこになった。美しいボディラインに魅せられて。ライブで見たいと28歳でダイビングライセンスを取得。石垣の海でホワイトチップというサメを初めて見た。ほんの数秒だったが、アドレナリンがマックスに放出され、心臓はドキドキ。でも生き生きと泳ぐ姿に感動しパワーをもらい、サメは怖いだけではないと体感した。

人を襲う怖いイメージをサメに持っていないだろうか？「それは誤解だ！」と宣言したい。500種類ほどいるサメのなかで人を襲う可能性があるのは数種類と考えられている。プランクトンを主食とするサメもある。そして実は、サメは頂点捕食者として海の生態系にとっても重要な役割を担っているのだ。

そのサメ類は、いま絶滅の危機に陥っている。理由は、温暖化や海洋汚染、ゲームフィッシングの対象にもなっており、なんと年間1億匹も減っているといわれている。サメがいなくなったら海の生態系はどうなってしまうのか。

大好きなサメや鮭、生きものを守りたい。私にできることは、生態系の保全、地球環境を守ることがまさに待ったなしという現状や私の想いを伝えること。

一人でも多くの方に地球環境へ目を向けていただくきっかけとなることを願って、伝え続ける。

F



お笑いタレント・ココリコ
田中 直樹

たなか なおき
1971年大阪府生まれ。お笑いコンビ・ココリコのボケを担当。また司会者、俳優としても活躍中。趣味は、動物もの(図鑑、DVDなど)、NBA、映画鑑賞。MSCエコーヘルアンバサダー、環境保護を推進していくプロジェクト「ナショナルジオオープンキャンパス」ナビゲーターを務める。日本テレビ「ZIP!」他に出演中。

石垣の海で見たもの



日本最北の農業高校がめん羊飼育 生徒の熱意が地域を元気にする

北海道遠別町

北海道遠別農業高等学校 教諭

石川 ウーリーエル



最北の農業高校に集まる

北海道遠別農業高等学校は、留萌・宗谷管内唯一で、かつ、日本最北に位置する農業高校です。生産科学科のみ、全校生徒わずか67人。生徒の約7割は遠別町を中心に近隣市町村の出身です。残りの約3割は全道や道外などから寮生活を送っています。

校訓である「礼・知・信」のもと、「地域で主体的にリーダーシップを発揮できる農業経営者及び農業関連技術者の育成」を指導の重点に掲げ、実学を通して実践力を身につける専門教育をおこなっています。約5・3畝の実習農場があり、生産部門では水稲、野菜、畜産、花と幅広く生産しています。遠別町の稲作は1918年から始まっており、北限地の水稲栽培地域で栽培される「最北のもち米」として有名です。

また、加工部門では生産物を用いた農産加工と肉加工、さらには遠別町と連携し本校の羊肉

加工品や地域の農産物を使って、地域の活性化に貢献する学習もおこなっています。今回はめん羊の取り組みをご紹介します。

羊肉の国内自給率はわずか0・6%なのをご存じですか？ 日本で流通する羊肉の99%はオーストラリアやニュージーランドなどからの輸入肉です。めん羊は北海道をはじめ全国で羊毛生産を目的に、ピーク時の1957年には約94万頭飼育されていました。しかし、安価な外国産の羊毛輸入や、化学繊維の普及とともに飼育頭数は急激に減少し、76年には約1万頭まで減少。その後、国産羊肉が注目されるようになり、現在では全国で肉用種を中心に約1・9万頭が飼育されています。

本校では希少価値の高い国産羊肉の生産を目的として、84年に学校敷地内に羊舎棟を新設、肉用種のサフォーク種を4頭導入し、めん羊飼育を始めました。サフォーク種は大型のめん羊で成長が早く肉質が良好です。導入当初は予算面

から飼育頭数を増やすのが難しかったため、地域のめん羊農家から繁殖用の雌羊を借りて交配し、徐々に頭数を増やしてきました。現在22頭を飼育しています。

自主的に朝と夕の餌やり

生産科学コースで畜産を専攻する畜産分会の生徒は、飼育管理実習をおこないます。生徒の朝は、寮の朝食が終わった7時30分から始まります。学校と寮は隣接されているため、生徒は食後すぐに実習服に着替えて羊舎へ餌やりに行きます。羊舎ではめん羊が待っていましたと言わんばかりに「メエーメエー」と大きな声で出迎えます。生徒は手早く配合飼料を与え、めん羊が食べている間に乾草を餌台に入れたり水飲み場を清掃したり、寝床を整えたりとテキパキと動きます。

畜産分会は2、3年生合わせて10人です。自主的に朝と夕方の餌やり当番を決めて、毎日活動

profile

石川 ウーリーエル いしかわ うーりーえる

1990年北海道倶知安町生まれ。帯広畜産大学畜産学部を卒業後、2014年から北海道遠別農業高等学校教諭。畜産科目を担当。「畜産基礎」のなかでめん羊の飼育や畜産の基礎を指導、また生徒とともに地域の未利用資源をめん羊の飼料として活用する研究を進めている。さらに遠別町のめん羊農家や酪農家と連携した校外学習をおこない、生徒と農家とが交流できる場を提供している。

北海道遠別農業高等学校

日本最北に位置する農業高校で、愛称は「遠農(えんのう)」。「地域で主体的にリーダーシップを発揮できる農業経営者及び農業関連技術者の育成」を指導の重点に掲げ、実学を通して実践力を身につける農業専門教育をおこなう。めん羊の飼育や作物の生産・加工、遠農高マルシェ、分会活動など多くの取り組みを実践している。「第6回ディスカバー農山漁村(むら)の宝」準グランプリ受賞。

命が無駄にならないよう

食品科学コースを専攻する生徒は、出荷後の畜産分会では、2016年から本校で収穫されたもち米から出るくず米を、めん羊の餌として与えた「もち米ラム」のブランド化や、エコフイードの取り組みも進めています。3年生は2年生に、餌やりのコツやめん羊への接し方などを積極的に教えており、頼もしさを感じるまでに成長しました。

食品科学コースを専攻する生徒は、出荷後の



上:生徒と筆者(右端)。コロナ禍で、めん羊に接するときは必ずマスクを着用する

下:パドック(運動場)で自由に走り回るめん羊

サフォーク種の羊肉を加工して商品にする学習

をします。生徒がこれまでに開発・製造した商品は、ラムワインナーソーセージ、ラムベーコン、

パストラミなどがあります。どの加工品も、生徒と教師が香辛料の配合や成形方法などを繰り返し実験し、また、大学や専門機関から講師を招き、

アドバイザーを受け商品化を実現しています。

3年生の岩本昌子さんは「めん羊の生産現場を知っているので、肉を加工する時は命が無駄にしないため、ロスをできるだけ少なくする工夫をしています」と話します。

さらに、6年前に本校では「食肉処理業」「食肉販売業」の資格を取得し、羊肉を生肉の状態でも販売できるよう整備しました。加工品だけでなく、

羊肉のスライス肉も販売できるようになり商品

の幅がさらに広がりました。

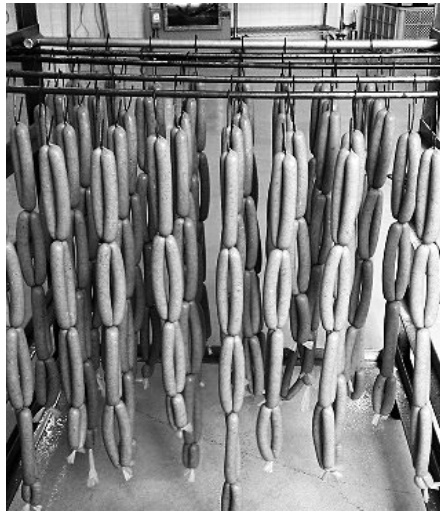
人気の「遠農高マルシェ」

5〜12月まで毎月1回、遠別町のイベントや学校敷地内にあるアンテナショップ「遠農高マルシェ」での販売会では、想いを込めて飼育し加工した羊肉商品を生徒みずから販売します。生徒は、自分たちの農作物や加工品をお客さまに披露することをとても楽しみにしています。

今年(2020年)は町内の道の駅やインターネットでの限定販売はおこなっているものの、コロナ禍の影響で地域イベントがすべて中止でしたが、ようやく10月から「遠農高マルシェ」が再開予定となり少しホッとしています。

販売会は、開店前から地元や近隣町村からの

お客さままで行列ができるほど人気があります。お客さまは、販売商品の質の良さや価格だけでなく、「遠別農業高校を応援したい」という温かい気持ちを持って来店され、生徒も毎回励ましの言葉をいただいています。販売会では、羊肉のスライス肉やラムウインナーソーセージなどの羊肉加工品だけでなく、本校で生産したもち米、野菜、花などの農作物、パウンドケーキやレトルト製品などの加工品が収穫時期に合わせて販売します。なかでも、羊肉加工品の需要は高く、



販売会の人気商品、ラムウインナーソーセージ

「国産ラムを食べてみたかった」「肉と脂身の味がとてもおいしい」と多くのお客さまが羊肉加工品を目当てに来店されます。ただ、販売数に限りがあるため、せっかく並んでいたいたにもかかわらず買えずにがっかりする方もいます。めん羊を多数飼育や大量加工ができない本校では、ニーズに100%応えきれないのが実情です。それでも生徒は他の商品のおいしさや生産ストーリーをお客さまに伝えて買っていたとき、「遠農高マルシェに来てよかった」と思っていた

だけけるよう努力しています。生徒は販売会で多くのお客さまと直接触れ合いコミュニケーションを取ります。

遠農高マルシェでの販売会を通して生徒は農業生産に対するモチベーションを高め、また地域とのつながりを理解します。

頑張りに応援者が増える

6年前、2014年度から本校の加工品や農産物が遠別町のふるさと納税の贈呈品として扱われるようになりました。遠別町役場と連携して、地域の知名度を向上させる目的です。この取り組みは当時では珍しく、多くのメディアで注目されて取り上げていただいたことで納税者が増加し、本校の加工品だけでなく遠別町全体へと効果が波及しました。その結果、遠別町のふるさと納税金額が一気に前年の4〜5倍に増加し、遠別町役場だけでなく地域の関連企業にも大きく貢献することができました。納税者からのアンケートには、「遠別農業高校が頑張る姿を見て応援したくなりました」「羊肉加工品がおいしかったのでリピーターになります」など温かい言葉が寄せられました。

畜産分会の新たな挑戦は、めん羊の餌として藻類のクロレラを使ったエコフィードの研究です。遠別町の食品添加物を製造する企業では、植物エキスを抽出した後のクロレラが活用できないという課題がありました。そこで、生徒はめん羊の飼料にならないか考え、水やくず米粉を配合してペレット状のクロレラ飼料を製造しました。現在はクロレラ飼料を餌として与えてい

る段階です。今後は肉質への影響を調査する予定です。クロレラが配合飼料と比較して同等以上の効果を発揮してくれることを期待しています。

存続の危機を乗り越える

本校は以前、新入生が20人を下回り、学校存続の危機とまで言われたこともありましたが、そこで、めん羊の6次産業化の取り組みや、農作物のASISAGAP認証取得や有機JASの認定を受けるなど農業生産の質を高めてきました。めん羊の飼育や加工品の開発は、学習環境の整備や学校認知度を高め、生徒募集にもつながっています。遠別町のふるさと納税額が増えた効果で、教室に大型モニターが設置されたり、校内にWiFiが整備されたりと学習面でのICT化が進みました。

2015〜17年は新入生が14〜18人で、全校生徒が45人でした。しかし、18年からは新入生が26人と増加し始めました。現在では、全校生徒が67人まで回復しました。生徒数が増えたことで学習面の幅が広がったり、部活動が盛り上がりつつきたりと学校全体の活性化につながっています。遠別町は、開拓から100年以上の歴史を誇ります。厳しい環境のなか、幾多の困難を克服し発展してきたフロンティア精神に満ちた町です。地域と一体となって農業学習の充実をはかり農業教育を発展させ、農業を学びたいとする生徒を増やし、そして高校生の柔軟なアイデアを取り入れた活動を地域と連携して実践していく所存です。

『100歳まで元気でボケない食事術』
堀江ひろ子・ほりえさわこ著



(主婦の友社・1,380円 税抜)

奇跡の健康長寿レシピ

青木 宏高

(NPO法人「食材の寺小屋」理事)

「大開脚」「脚上げ」「自転車こぎ」という驚きのストレッチングと、食欲をそそるチーズチキン一品の写真で構成された表紙。ストレッチングの人物が104歳になる本書の主人公である。表紙に続くページには主人公の全身写真が現れ、大きな文字で「堀江家の『ひいじい』は104歳、大正4年生まれです」の紹介があり、隅に「ひいじい」は甘いものが大好き、元へビースモーカー」の記述。健康志向の人にはためらうような内緒話が見られる。

さらにひいじいのページは続く。毎週、バリアリの現役のように仕事や会合に飛び回り、月に6、7日はスーツを着て外出し、血圧、中性脂肪、血糖値、コレステロール値は正常値で、ボケや生活習慣病とは無縁。毎日4000歩あるき(90歳までは1万5000歩)、家族旅行を楽

しみ、室内ウォーキングも休むことがない。趣味は読書で、人情あふれる時代小説を、2日に1冊のペースで楽しむ。家族は、ひいじいの怒ったところを見たことがないと話す。

健康長寿の秘訣は「毎日の食事のおかげです」とひいじいは明かし、家族は3食しっかり食べることを勧める。

この本は料理研究家である堀江ひろ子、ほりえさわこさん母娘が、父であり祖父である「ひいじい」を通して料理家の立場から書かれている。実は、ひろ子さんの母親である堀江泰子さん(故人)も料理研究家。つまり堀江家は、三代続く料理研究一家である。従ってこの本の内容は、おのずと元気でボケない料理のレシピ集であり、100歳をめざす知恵の食事術になっている。きれいな料理写真とわかりやすいレシピに、「100歳料理」に挑戦したくなる。

今年9月時点の100歳以上の人口は8万4500人。老人福祉法制定の1963(昭和38)年には全国に153人だったので、半世紀経て世界に誇る長寿国である。『長寿村の100歳食』の著者で知られる食文化研究家の永山久夫さんは、長寿のノウハウの輸出を力説する。

パプアニューギニアで第二次世界大戦の終戦を迎えたひいじいは、戦後、遺骨収集に奔走している。皆を日本に連れて帰らない限り「僕は死ぬわけにいかない」と語る。

その「使命」というスパイスが、ひいじいに力を与えているようだ。

読まれてます 三省堂書店農林水産省売店 (2020年9月1日~9月30日・税抜)

タイトル	著者	出版社	定価
1 令和2年度 強い農業・担い手づくり総合支援		創造書房	8,500円
2 フードテック革命 世界700兆円の新産業「食」の進化と再定義	田中宏隆、岡田亜希子、瀬川明秀/著 外村仁/監修	日経BP	1,800円
3 水産改革と魚食の未来	八木 信行/編	恒星社厚生閣	2,600円
4 黒いサカナ	保坂 祐希/著	ポプラ社	1,600円
5 平成農政の真実 キーマンが語る	菅 正治/著	筑波書房	1,500円
6 データ農業が日本を救う	窪田 新之助/著	集英社インターナショナル	840円
7 2030年のフード&アグリテック 農と食の未来を変える世界の先進ビジネス70	佐藤 光泰、石井 佑基/著	同文館出版	2,300円
8 フードバリューチェーンが変える日本農業	大泉 一貫/著	日本経済新聞出版社	1,800円
9 木材生産技術の原理・原則 技術の本質を学び現場に活かす	湯浅 勲、杉山 要/著	全国林業改良普及協会	2,500円
10 季刊地域42号 2020年夏号(雑木とスギの知られざる値打ち)	農山漁村文化協会/編	農山漁村文化協会	857円

アグリフードEXPO オンライン

「コンシェルジュ」がつなぐ 国産にこだわった農水産物の 展示商談サイトを開設します

新型コロナウイルス感染症の影響を踏まえ、例年開催してまいりました「アグリフードEXPO東京」と「アグリフードEXPO大阪」の代替として、11月2日(月)から「アグリフードEXPOオンライン」を開設し、国産農水産物のオンライン展示および商談成約に向けた「コンシェルジュサービス」を開始します。

「アグリフードEXPOオンライン」は、全国各地で国産ブランドを担い、魅力ある農水産物づくりに取り組む農水産業の経営者の皆さまや、地元産品を活用したこだわりの食品を製造する食品企業の皆さまの販路拡大支援を目的とした展示商談サイトです。公式ウェブサイトを通じて、オンライン(ZoomやSkypeなど)、電話対面などによる商談の機会を設けます。

コンシェルジュがお手伝いします

「アグリフードEXPOオンライン」の最大の特徴は、運営事務局による「コンシェルジュサービス」です。EXPOの運営スタッフが出展者とバイヤーの皆さまをつなぐ「コンシェルジュ」となり、登録手順のご案内から商談先のご提案、商談後の結果のフィードバックまで、ご希望に合わせてきめ細かく対応いたします。

コロナ禍で縮小した販路を拡大・多様化したい、幅広い業種のバイヤーとまとめて商談したい、全国規模のバイヤーと商談したいなど、販路拡大に意欲のある皆さまのご参加をお待ちしております。

(情報企画部)

公開される出展者ページのイメージ

① 出展者の名称、キャッチコピー

② 動画

生産地や商品へのこだわり、開発のストーリーがわかる映像

③ 出展商品の説明

商品名、商品の概要、商品画像、旬の時期、出荷・販売可能時期、おすすめの食べ方など

④ 出展者プロフィール

自己紹介、商品への想いなど

⑤ コンシェルジュからのメッセージ

⑥ 資料請求・商談希望・お問い合わせ

バイヤーの皆さまが資料請求や面談希望、お問い合わせをする場合は、ログインが必要となります(ログイン時に利用申し込みが必要です)

アグリフードEXPOオンライン
プロ農業者たちの新たな国産農産物・オンライン商談

トップページ 開催概要 出展について 出展者一覧 出展者専用ページ

出展者一覧

1 アグリ農産 (株)
青山の新鮮野菜と乳製品をお届けします

2

3 出展商品

- ・ 青山大根
- ・ 赤坂人参
- ・ 内堀新鮮牛乳

出展者プロフィール

4
青山の地産農産物をより多くの人に届けたいと専門的に農業を学びました。常に愛情を持って大切に育てた、青山産の農産物をぜひお楽しみください!

コンシェルジュからの応援メッセージ

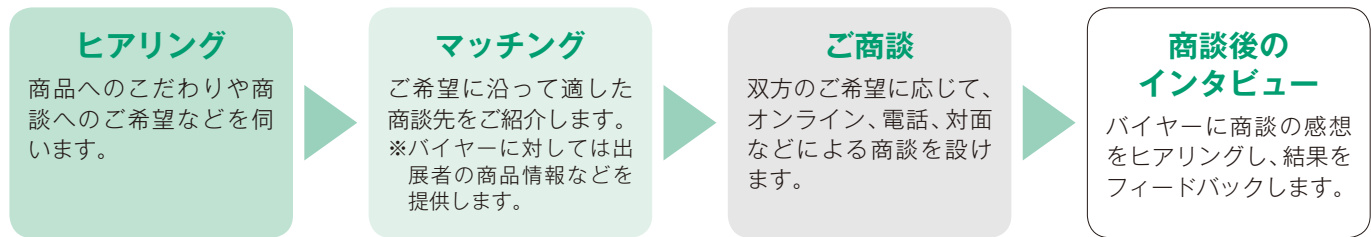
5 産農産物を、名産品にまで育て上げた熱意と姿勢。そこには生産者としてのプライドと産地への愛情があふれています。

HP
https://agri-foodexpo.com/

連絡先
〒107-0062 東京都港区南青山1-1-1 新青山ビル西館8階
TEL. 03-5775-2855

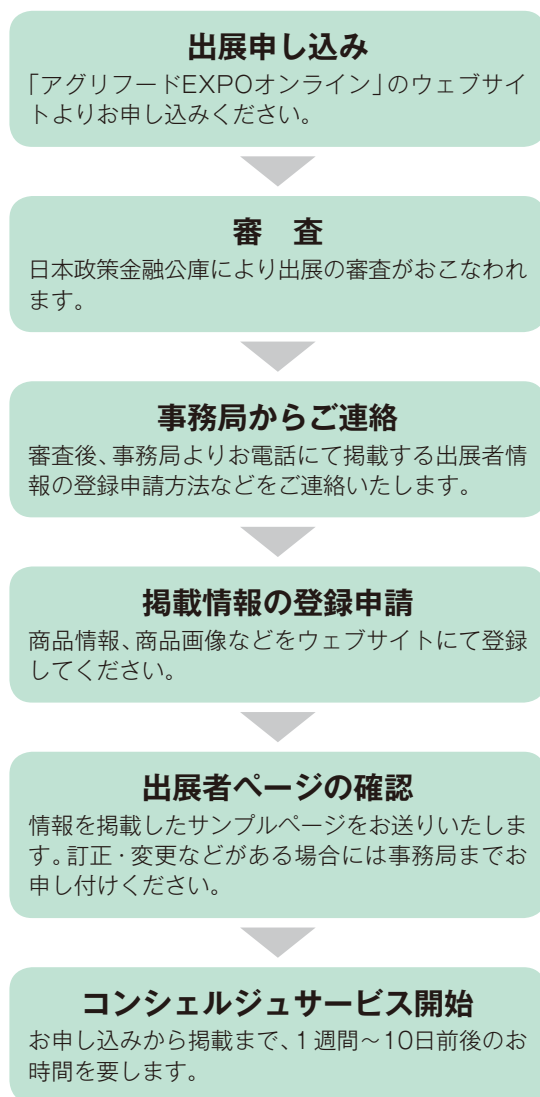
6 [商品パンフレットダウンロード](#) [資料請求・商談希望・お問い合わせ](#)

コンシェルジュサービスの流れ



●一例です。随時、出展者のご希望に合わせてサポートします

申し込み方法と開催スケジュール [会期 2020年11月2日(月)~2021年3月31日(水) 予定]



【開催概要】

- **名称** アグリフードEXPOオンライン~国産農水産物の展示商談サイト
- **出展料** 月額1万円(税別)
※掲載料・コンシェルジュサービス料としてウェブサイトに掲載された日から、1カ月単位で、後払いでお支払いいただきます。
※退会手続きをされない限り、1カ月単位で自動更新となり、翌月分の出展料が発生します(日割り計算はいたしません)。
※退会を希望される場合は、ウェブサイトの「お問い合わせ」からお問い合わせいただくか、または事務局へご連絡ください。事務局からお送りする退会申込書に、必要事項をご記入のうえ、退会希望日の前日までに事務局へご提出ください。
- **主催** 株式会社 日本政策金融公庫
- **運営** 「アグリフードEXPOオンライン」事務局
エグジビション テクノロジーズ株式会社

【お申し込み】

- **お申し込みいただける方**
 - ①国内で農業・水産業を営む方
 - ②国産農水産物を主原料とする食品を主として製造する国内食品企業
 ※①②に該当し、事務局が実施するアンケートにご協力いただける方に限ります。
- **募集期間**
2020年10月16日(金)~2021年2月12日(金)
※最終申込日は変更する可能性があります。
※お申し込み上限数は500社です。上限に達した場合はお申し込みをお待ちいただくことがございます。
- **申し込み方法**
「アグリフードEXPOオンライン」ウェブサイトよりお申し込みください。
※登録情報に不備がある場合、掲載に遅れが生じる場合がありますので、不備がないようにご協力をお願いします。
※ご不明な点は事務局までお申し付けください。
- **その他**
 - ・お申し込み後に、日本政策金融公庫による審査があります。
 - ・出展内容が趣旨にそぐわない場合は、出展をお断りすることがあります。
 - ・共同出展は受け付けておりません。

- **お問い合わせ先** : 「アグリフードEXPOオンライン」事務局 / エグジビション テクノロジーズ株式会社
〒107-0062 東京都港区南青山1-1-1 新青山ビル西館B階
TEL / 03-5775-2855 FAX / 03-5775-2856 E-MAIL / agri@exhibitiontech.com



アグリフードEXPO オンライン



<https://agri-foodexpo-online.com/>



◆日本の会社の99%以上は中小零細企業です。これら中小企業が多くが、下請け・孫請けとして大企業を支える役目を担うのが日本の産業構造です。

その周辺部からまれて、枠外に置かれていたのが農林水産業の経営者ではなかったでしょうか。それが、いまでは法人化が進み、産業構造の一角を構成する位置にまで成長してきたように思います。

本誌では毎号、「変革は人にあり」「新・農業者」「まちづくりむらづくり」などで、農林水産業に携わる優れた経営者が紹介され、いまだ苦戦している経営者を照らす明るい灯台の光となり、励みともなっ

ています。

低迷するGDP(国内総生産)の回復をねらう行政は、大企業優先の政策に偏りがちですが、安全・安心な食料の自給生産という国家の基本目標の達成には、農林水産業の育成こそ大前提となります。

大都市への一極集中を是正し、エネルギー自給をめざして再生エネルギーを開発するにも、農山村地域の振興が不可欠です。それぞれの風土に根ざした農林水産業を再生させ、わが国の産業構造の再構築をめざしてほしい。

その強い応援団として本誌の役割に期待しています。

(鹿児島市 吉見満雄^{みつお})

ご意見・ご感想をお寄せください

本誌では読者の皆さまからのご意見・ご感想を幅広く募集しております。特集企画への感想や誌面に登場していただいた農林漁業者へのメッセージ、農林漁業についてのご意見、また、誌面へのご意見、ご提案もお待ちしております。お名前、ご住所、電話番号を記載のうえお送りください。

ご意見を掲載させていただいた方や参考にさせていただいた方には、図書カードを差し上げます。

【送付先】

メール anjoho@jfc.go.jp FAX 03-3270-2350

郵送 〒100-0004

東京都千代田区大手町1-9-4
大手町フィナンシャルシティ ノースタワー
日本政策金融公庫 農林水産事業本部
AFCフォーラム編集部宛て
Tel. 03-3270-2268



右記のコードもご利用ください →

編集後記

④長野県のリンゴ農家を題材とした映画『実りゆく』を観た。主人公は後継者と期待されながらも芸人をめざして東京と長野を往復、父親との関係は不安定。父親は近隣農家と法人化の道を探りつつ息子を見守る。半農半Xの要素も現状を反映。

今回の特集3取材はいずれも後継者の確保に成功した事例。共通点は若手人材の確保である。(平野)

⑤「新農業者」で取り上げた柴原さんが、販売拡大にも熱心に取り組んでいらっしゃる。エゴマ油は島根県内インターネット販売が中心ですが、今後は広島県内での販売も視野に入っているとのこと。品質には定評のある柴原さんの油、販売拡大の力には安定生産。技術向上・機械化に向け、奮闘は続きます。(高雄)

⑥規模拡大を図り地域農業を守る新潟ひかりっこ株式会社。ある時、斎藤社長は最年少の従業員から「おいしい牛肉を食べたい」と言われ、従業員全員を焼き肉店に連れて行ったそう。「1人1万円以上も食べたよ。おいしいものを食べて元気に仕事をしてもらいたいね」。従業員の成長に期待し、見守る斎藤社長の優しい目が印象的でした。(山本)

⑦「地域への助走」は北海道の農業高校が舞台です。石川先生が何度も書き直し寄せてくれたレポートはとて丁寧で、眼差しの温かさに感銘。生徒の3割が全道や道外からというのもうなすけません。数々の取り組みは、生徒と生徒の間に確固とした絆、信頼関係が築き上げられているからこそ。厳しい寒さの冬がもうすぐ訪れますが、遠慮の先生、生徒のハートは熱い。(城間)

AFCフォーラム Forum

■編集

前田 美幸 平野 伸介 高雄 和彦
山本 晶子 城間 綾子 竹中 夕美

■編集協力

青木 宏高 村田 泰夫

■発行

(株)日本政策金融公庫 農林水産事業本部
Tel. 03(3270)2268
Fax. 03(3270)2350
E-mail anjoho@jfc.go.jp
ホームページ <https://www.jfc.go.jp/>

■印刷 佐伯印刷株式会社

■販売

株式会社日本食糧新聞社
〒104-0032 東京都中央区八丁堀2-14-4
ヤブ原ビル
Tel. 03(3537)1311
Fax. 03(3537)1071
ホームページ
<http://info.nissyoku.co.jp/koudoku/>
お問い合わせフォーム
http://info.nissyoku.co.jp/modules/form_mail/

■定価 523円(税込)

生産者の ありたい姿を 実現する



仲野 真人

NAKANO Masato

株式会社食農夢創
代表取締役

「マーケティング」という言葉はビジネス界ではよく耳にする言葉である。

しかし、日本語に訳すと「売れる仕組みづくり」であるということあまり知られていないように感じる。市場調査や消費者からアンケートをおこないニーズを探るようなイメージを持つ人が多いかもしれない。

しかし、マーケティング界の世界的権威であるフィリップ・コトラー氏によると、現在は「マーケティング4.0」の時代に突入しているという。

「マーケティング4.0」のキーワードは「自己実現」。つまり、現代社会では顧客の自己実現を支援するような商品やサービスを提供することが求められている。しかし、「自己

なかの まさと

1982年生まれ。「農林漁業を夢のある食産業へ創造する」をミッションに全国の現場を飛び回る。6次産業化エグゼクティブプランナー。神奈川県農業経営アドバイザー連絡協議会所属。

実現」は事業をおこなう側にこそ重要であると感じている。

お茶を紅茶に加工して販売する6次産業化に取り組んでいる生産者がいた。なかなか思うよ

やりたいことがはっきりした。商談でも熱い想いとこだわりを伝えられるようになり、取り引きにつながるが増えたのだ。半年間の支援後には「『自分がどうしたいか』ということが明確になりました」と



©山梨将典

うに事業が進まず、私が事業計画の再作成と実行支援のお手伝いをするようになった。そこで感じたのが冒頭に書いた「自己実現」の重要性である。

最初にお会いしたときは、「何をすればよいのかわからない」と後ろ向きであったが、事業計画を作成する過程で改めて自社の強みを分析し、そのうえで「どうありたいか」という「理念・ビジョン」を再定義し、目標に向けてどう行動するかを検討した。

その結果、生産者として自分が

いう言葉をいただいた。

確かに短期的な経営改善も必要であるが、生産者の「ありたい姿」を明確にすることが経営を支援する側の役割なのだろうと感じた。

マーケティング4.0の「自己実現」はあくまで現代の「売れる仕組み」をひもといたものだ。

しかし、これからの時代は生産者が農林漁業を通して「自己実現」をめざす姿こそが消費者の心をつかむ最大の付加価値になるような気がしてならない。F

■ 農業経営アドバイザー

農業経営者のニーズに対応し、経営への総合的的確なアドバイスを実践する専門家です。2005年、農業経営の発展に寄与することを目的に日本公庫（当時、農林漁業金融公庫）が資格制度を創設しました。本コーナーは、上級資格である上級農業経営アドバイザーが執筆します。

シリーズ特集：事業承継最前線／稲作経営
水田農業・承継のカタチ



『力をあわせて稲かりだ』福井 晴基 愛知県常滑市立常滑東小学校
(全国土地改良事業団体連合会主催「ふるさとの田んぼと水」子ども絵画展入賞作品)

■AFCフォーラム 令和2年11月1日発行(毎月1回発行)第68巻7号(842号)
 ■発行/(株)日本政策金融公庫 農林水産事業本部 〒100-0004 東京都千代田区大手町1-9-4 Tel.03(3270)2268
 ■販売/株式会社日本食糧新聞社 〒104-0032 東京都中央区八丁堀2-14-4 4F原ビル Tel.03(3537)1311 ■定価529円 本体価格476円

